

## 四季の山 夏山 劔岳報告書

記 石塚昌孝

参加者 富樫信樹 松尾治 加藤春久 津田保太郎 宮川美智子

正田 緑 橋本久子 正田範満 石塚昌孝 (9名)

行動 8月10日(金)

21時30分北本駅発⇒東松山IC⇒関越／上信越道⇒長野IC⇒2時00分扇沢CS着

東チベット踏査隊の7名と正田さんの8名が富樫車、正田車

に分乗、宮川さんは11日に室堂で合流予定。

8月11日(土) 6時扇沢SC発 扇沢(6.30)-室堂(7.55)9.10室堂発-9.40R1 雷鳥沢-10.30-R2-11.30R3 雨具着用 12.35-劔御前小屋-13.25 劔沢キャンプ場着。 15.40-夕食-18.00 就寝

宮川さんと合流後出発。天候ははっきりしない。いよいよ初体験の始まり。20キロ近い荷物と初めてのアイゼン、初めての靴、術後の不安。とにかくひたすら頑張るだけ。

途中で雨が降り出し条件は悪い。それでもなんとかキャンプ場に到着。キャンプ場は既にテントでいっぱい。やむを得ず、水場、トイレから遠いはずれに設営。豪華なしゃぶしゃぶと早い就寝で明日の体力を。でも、眠れなかった。

8月12日(日)3.30起床-4.30朝食-5.20出発-5.50 劔沢雪渓-11.05 長次郎乗越-12.10 劔岳山頂 15.20-劔山荘-17.00 劔沢キャンプ場

前日に正田さんが天気図を採ってくれたが今日も良くない予想。ある程度覚悟していたので方ない。

正田さん指導のもとアンザイレンを。富樫さん-橋本さん-津田さん-正田さんと、もうひとつは田緑さん-宮川さん-石塚。松尾さん、加藤さんは単独でさあ出発。心配された天気は快晴に、まったく素晴らしい。

しかし登ることに必死、ザイルも弛ませることのないよう加藤さんから注意を受ける。残念ながら景色を楽しむ余裕なし。何とか山頂に。下りはカニの横這いもさほど緊張せずに無事通過。

劔山荘で大休憩

8月13日(祝)6.00起床-7.45出発-9.00劔御前小屋-11.45室堂着⇒室堂(12.45)⇒扇沢(15.40)⇒20.00北本駅着 解散

いよいよキャンプ場とも別れテントの撤収。強風と雨で最悪。悪天候のため真砂岳雄山のルートは中止に。来た道に戻る。

強風の中での歩行を緑さんに教えてもらいながらヘトヘトで室堂へ室堂は遠かった。

今回も皆様にご迷惑をおかけしながら貴重な体験をさせていただき有難うございました。最後に集合場所を間違えましたこと、深くお詫び申し上げます。





## 劔岳合宿を終えて

記 橋本 久子

何度思い返しても長次郎雪渓は美しい。

3年前、初めて劔岳に登って時はただカニのタテバイ、ヨコバイを無事通過したことに満足してしまい長次郎雪渓を登るなどとは思いませんでした。

ところが、東チベット遠征が決まり、その訓練の一環として夏の劔岳合宿が計画され、憧れの長次郎雪渓を登ることになった。幸運である。

1日目は、室堂から劔沢のテント場までの荷揚げをし、初めてのテント泊を経験する。家をでる時まではそれほどでもなかったザックの重さが肩に食い込み、足の裏がつぶれるほどだ。みんなはもっともっと重い荷を担いでいるのだと自分を励ます。

初めての山ご飯は、富樫隊長が用意してくださった心づくしのしゃぶしゃぶである。狭いテントの中で膝を抱え、背中を丸めて皆で囲んだしゃぶしゃぶの鍋の味は忘れることが出来ない。

隊員が一つになったと感じた瞬間である。

2日目はアタックザックに変えていよいよ登山開始。スプーンカットの雪原で、トップのコンパスについて行けず足をもつれさせて1回転倒。転倒こそ滑落につながる危険行為である。気を入れ直してルートファインディングをしながら必死に後を追う。

アンザイレンは2つのグループに分かれてスタート。正田さんが最後尾について細かな指示を出してくれるのでとても安心して登れたことを思い出す。ゆっくりと一步一步アイゼンを効かせて歩を進める。右手にハツ峰、左手に源次郎尾根を望みながら、手にはザイルをしっかり握り、雪渓を登るのは緊張感のある充実した時間であった。

熊野岩では冷たく美味しい水をたっぷり飲み、水筒にも詰めて再び登り始める。進路を左手に取り、左俣を過ぎて雪渓を登りつめると、頭上には青空が広がり、胸のすくような高度感だ。目の前に迫る岩稜帯の黒々とした岩肌もくつきりと浮かび、何枚もシャッターを切る。いつか絵に描いてみたいと思ったのだ。

アイゼンを外しガレ場を登りきれば目指す劔岳頂上である。全員笑顔で握手を交わし思い思いに記念撮影



をする。仲間と一つの山に登るとはこういうことなのだと思う。

下りは、雪渓では見られなかったイワギキョウやウサギギク、タカネヤハズハハコたちと出逢えて嬉しかった。トウヤクリンドウも多かったな。高山植物の健気さは喻えようもなく愛おしい。

3日目の朝、降り出した雨と戦いながらテントを撤収して帰途に着く。

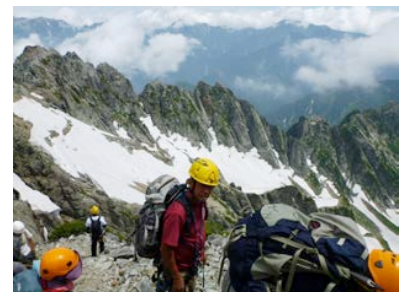
風雨は一段と激しさを増し、主のいないテントが吹き飛ばされていくのを目の当たりにして、山の天候の激変の恐ろしさを肌で感じた。雨具に身を固めひたすら室堂目指して歩き始めるが、強風に身体ごと吹き飛ばされそうになる。緑さんに教えてもらった耐風姿勢を取りながら歩を進めるが室堂ターミナルまでの道のりはひどく長く感じた。この道のりでパーティはだいぶ千切れたが、ほどなく全員無事にターミナルに集結。黒部ダムあたりになると空には太陽が顔を出す。

しばしの悪天候は、軟弱な自分への試練であったか。

この合宿ではいろいろ学ぶことが多くあり、親切に教えてくださったメンバーの皆さんにはとても感謝している。今回の経験を次の登山に生かし、より達成感のある山登りが出来るように努力して行きたいと思う。

今回の合宿を計画し、お世話くださった山行集会委員会の皆様、本当に有難うございました。

お蔭様でとても充実した楽しい合宿経験ができました。これからもよろしくお願いします。



## 剣岳合宿

記 津田保太郎

今回の剣岳合宿は秋の東チベット踏査隊訓練が主目的あっただけに、最近のチベット入国が危ぶまれている状況下での剣岳合宿には何かチョット重苦しさを感じていた。室堂では連なる山々を目前にしてそんな重苦しい気分も忘れ、剣沢をめざした。そして、無事、剣沢にテント設営。6人テントにオジサン、オバサン9人もがしゃぶしゃぶ鍋を囲み誰もが山に来た幸せを感じたのでした。

合宿2日目、昨夜の時々テントをたたく雨音に今日の天気もどうなることかと3時半に起床。長次郎雪渓の出合に着くころにはすっかり天気も回復し青空が剣岳北方稜線に広がり始めた。そして、雪渓上部の「熊の岩辺りまで日が差し始めている。

この出合から高低差約1000mの長次郎雪渓を目前にするとなぜか不思議にぐっと力が身に入ってくる。2班に分かれ、アンザイレンしながら登り始める。登高ペースが遅い僕も先頭リーダーのはからいでなんとかついていく。周囲には源次郎尾根や八つ峰の岩壁、稜線にかけての雪と岩の素晴らしい展望が広がっている。

るのだが、次第に呼吸が荒く景色に目を向ける余裕がない。ただひたすら先行者とのザイルの間隔に気を集中するばかりだ。

雪渓も半ばを終える頃、次第にザイルを持つ手もなれ、周囲の景色が目に入り始めた。次第に苦しかった呼吸もやわらぎ始め、同時に今ここを登っていることの幸せを感じ始めた。そして、次回は源次郎尾根や八つ峰に行きたく、何度も左右の岩壁に目がとられ、おもわず足を止めそうになる。チベット本番での氷河登高を思い浮かべながらザイル先の先行者に集中を取り戻したのでした。

「熊の岩から上部の雪渓は傾斜も増し、大きな雪渓段差を無事乗り越えたころ、全員の調子もさらに上がり始め、正午前には稜線に達し、ザイルを解くことが出来た。そして、好天気の本岳に立つことが出来た。下山を始め前本岳を越えた頃、テント場近くの小屋が見え、誰かのあそこにはビールがあるぞの声に励まされテント場に無事到着。ほぼ12時間行動の長い2日目でした。

3日目はテント撤収の最中、雨、風が次第に強まり、テント場を後にする頃にははいよいよ風雨が強まり、剣御前までの登りではガスの中をただひたすら剣御前小屋を目指すだけ。そして、雷鳥沢に下り、室道に近づくころ、今度はあまりにも多い観光客にうんざりし、もう一度あの静かな長次郎雪渓に舞い戻りたくなっただけは私一人ではないかもしれない。

短い3日間でしたが、収穫の多い合宿でした。私の登山歴にも忘れてしまう山行、なぜかいつまでも忘れられない山行があります。今回の本岳合宿は多分忘れられない山行になりそうです。

